

旅には危険が伴うよ。

親友気取り。

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

TSして異世界へ行つたら、後から親友がやつてきた。

旅には危険が伴うよ。

目

次

旅には危険が伴うよ。

「……子供、こんな所に？」

ある日の森の入り口。誰も立ち寄らないだろう場所にその子はいた。
私が転生してここへやつてくる前に住んでいた日本のような治安もなく、魔物もいて、こんな所に放置するなんて普通はあり得ない。
捨て子だろうとはすぐに分かった。

「見捨てるなんて事は、駄目だよね……」

母性本能だろうか？　なんて自分に冗談を飛ばして苦笑しつつ拾い上げて森の中へ戻る。

今は確かに女で、所謂TSってやつかも知れないけど精神は男だ。母性本能なんてあるわけない。

「いつか魔女に育てられたなんてなるのかな？」

魔物払いの結界を抜けて、畠の脇を歩き、ようやくついたボロ小屋に辿り着いた。
「ここが君の家だよ。少なくとも、出ていきたいと思うまではね」

2 旅には危険が伴うよ。

私は魔女。……つていう名前な訳じやないけど、これで大体通じる程度には名が知れた転生者だ。

死因は何かの事故だったと思う。学校の帰りに親友と歩いていたら、その時に。テンプレ的な神様とは会えなかつたけど、テンプレ的な中世風異世界に決して弱くない魔法力を持つて産まれ出た事は幸いだつた。

性別が変わつてしまつた事こそ戸惑いはしたけど、新たな生を得られた事と若干の才レTUREEで生活には困らなかつたね。

様々な依頼をこなしてお金を不得て、豪華な食事を食べて、あれやこれやと持て囃される。

人によつては新たな目標を目指したり野望を抱いたりと調子に乗つていくのだろうけど、私にはそれができなかつた。

しばらくはそんな生活に満足していたけど、段々疲れて來たのだ。

結局の所、異世界転生して力を手にした所で私の精神は現代で育つた事に変わりない。

有名になるにつれて高まりかかる期待の声にまともな返事もできず、降りかかるやつ

かみをどうする事もできない。

だつて戦いの場において魔法で幾らでも敵を吹つ飛ばす事はできても、街中でそんな事をする訳にもいかないでしょ？

やがて疲れ果てた私は、逃げるしかできなかつた。

真夜中にフードを深く被つて、懷にお金とかなんか大事な物だけ持つて。夜逃げだね。

正しく魔女と呼ばれるにふさわしい格好で飛び出した後はあつちこつちを放浪して、あつちこつちで例の魔女だと噂されて、いたずらに自分の名前を広めるだけの結果だつたけど。

今住んでる森の中の小屋に辿り着いたのは偶然だ。

人目を避けてもう魔女らしくどこか山奥に籠つて過ごそうとふらふらと森へ入つた時に偶然辿り着いた。

その時は驚いたよ。

だつて誰も住んでいないと思つてたのに老人が一人で住んでいたんだもの。

冷静に考えれば周りの畑や手入れの行き届いた道具の数々を見て気が付くんだけど、当時はそんな余裕もなくてね。

4 旅には危険が伴うよ。

その人は、なんというかとも、偏屈つて言葉が似合つてた。

急いで立ち去ろうとすれば引き留めるし、だからと言つて何かする訳でもなくぶつぶつ文句を言いながら泊つて行けという。

疲れてたし休めるならと乗つかつちやつたけど、あれ老人が悪い人だつたらもうダメだつたよね。

しばらくして今度こそ出て行こうとお金を置いてロープを被れば、仕事が残つてると
言つて引き留め、あるいは雪で道がなくなるからまだいろつて。

そんな事をいつまでやつたかと言えば……死ぬまで。

口クな医療もない世界でそもそも長生きだつたのに、老い先が長くあるわけがない。
つい先日、ついに息を引き取つた。

もう聞けなくなるからどうして私を引き留めたのかを聞いてみたらなんて言つたと
思う？

「最後に見る顔がしきてるのは気に入らないから」だつてさ。

小屋を引き継いでからはついに一人なんだと思つていたのに、今日のこれだ。
ベッドに寝かした子供を見て首をひねる。

「んー……」

赤子の面倒、どう見ればいいのさ？

私つてば前世があると言つても子育てとは無縁な高校生男子、そして今も子供どころか人とすら殆ど無縁だったんだよ？ どうしろつて言うのさ！

「……あの人、子供いるつて言つてたつけ」

あーもう、何でタイミングで逝つてるんだあの老人は！ もうちよつと長生きしろよ

！
あ、やばい。騒いでたらぐずりだした。

母性本能あるなら何とかしてよ！ ……全然わからん！

と、とりあえず離乳食？ いやでも食べられるくらいなの？

……た、食べられない、まだ離乳じやなかつたらど、どう、私か!? いやいやいや、無理無理！

うわおーああ！

・・・・・

6 旅には危険が伴うよ。

十年後。

意外と手間……かからんかつたね。

確かに拾つてから数日数か月数年は当然子供の振る舞いだつたけど、成長するにつれてどんどん理性的というか……。

「賢過ぎる、かな」

「うつ」

私の手伝いをしてあれこれをするのは歩けるようになつてすぐ。成長が早いんじやないかな？

数歳で既に簡単に伝えた内容の言葉でもちやんと自分で解釈して実行できるし。
「もしかして……」

「え、ええつと……」

「天才？」

「……えー」

安心した顔をしてるけど、当然私だつてこの子が天才だと本気で思つてるわけじやない。そういうかまかけだ。

賢い理由が天才だという理由でないのはその顔で確信した。

ふふつと笑いが出てしまうと向こうも笑う。

この子も前世の記憶を持つ転生者のアレかも知れないけど、今はいいや。

向こうからしてみれば私はこの世界の森に住む物好きな魔女。同じ転生者だつて分かりやしない。

多分だけど、この子は私の方からそうなのかと聞かない限りは自分の正体については明かさないだろう。

ちゃんと秘密を言つてくれないのは寂しいけど、こればっかりは仕方ないとして諦めるしかない。

それまた数年。

あの子はもう子というよりも、青年と言つた方が似合う年齢になつた。

「……何じつと見てんだ？」

「ううん。何でもない」

反抗期？　な訳ないよね、うん。

彼はこの世界を見て回りたいだけだ。最近は私から周りの街について聞かれたり、地図が無いかと揺すられたりしてゐるし。

ただ……。

「こつちの街はどういう所なんだ？」

「えーっと、確か漁港だつたような……」

「こつちは？」

「なんだつけ……」

「……これは？」

「……森？」

「俺達の住んでる所じゃないのか……？」

「あ、そ、そうだ。そうそう」

放浪した末に引きこもり始めた魔女だよ!?

周辺地理なんて分かる訳ないじやん!

というか何なら今自分の居る国すらもしかしたらわかんないかも……。

だってこの世界じや境界線がしつかりしてるわけでも、衛星地図がある訳でもない
し。

「私は悪くない！」

「わかった、わかったよ」

軽くあしらわれた。

「で、君は旅に出るのかい？」

「……そうだ。育ててもらった恩も返せば、本当に悪いけど」

「そう決意した瞳は、いやその顔立ちは。

「昔の友人によく似ているね。絶対に折れないんだ」

中身も、外見も。

今こうして見れば、そつくりそのままかつて親友だった、前世で親友だった彼に似ている。

あの時死んで、そして転生してきたのは私だけじゃなかつたんだ。

一緒に暮らして来てて確信がなかつたけど、ようやく納得がいつた時には少し遅かつた。

今更判明した再会に喜びたい所だけど、本当に今更だ。

ここで実はと切り出せば、そんな私に育てられたことをなんて思うか。

「旅に出るなら一つ忠告だよ」

「忠告？」

「自身の持つ“本当の名前”。魂に刻まれたそれは、呪術でよく使われるんだ。あるか

どうかは知らないけど、絶対人に教えたら駄目だよ」

「……分かった」

そこで素直にわかつちやう辺り、本当に確定だもん。名前がある事。

10 旅には危険が伴うよ。

寂しくなるなあ。

老人と過ごした数年、この子……いや彼と過ごした十数年。人目を避けて過ごしたかつたのに、いざようやく一人になれると考えて寂しいとしか思えない。

彼だから特別扱いしたのだろうか？ なんて、まさか！

前世の時みたく、また馬鹿ができればなんて期待したのかも。この世界じゃ満たされなかつた、気の合う人とあーだこーだしながらの冒険。それがようやくできるのかもつて。

雪が降るからと今は引き留めて、ちょっと笑う。

彼をどこかへ行かせない為の言い訳にあの老人と全く同じ事を言つてる。でもそれも、私のような弱い人間だから引き留められたんだ。

しばらく経つて積もつた雪が溶ければ、彼はすぐに準備を始めた。

「俺はある人を探さないといけないんだ」

なんてずつと言つてさ。

余計に言い出しにくいじやん、私がそれだつて！ ンモオオオオオオ！

「うわびつくりした。急に発狂すんなよ」

誰のせいだと……！
ごほん。

てな感じで彼は夢でよく見るという親友を探す旅に出る。

転生だのなんだのという事は流石に言わなかつたけど、それがこの世界に生まれた意味なんだーって。

「本当に、行くんだね」

「ああ！」

準備はすぐに終わる。

私の魔女としての知識で作つた治療薬や小技の効く魔法が刻まれたお札（正式名称不明）を持ち、家にあつた使つてないお金も持たせて。

「……駄目だよ、やつぱり」

去り行く背中を見て呟く。

外の街や割と居る魔物についても教えはしたけど、彼の性格はよく知つてる。
やつぱり心配だ。

すぐに何かに巻き込まれて、すぐに力尽きてしまうだろう。一人で行くには厳しい。

気が付けば、先回りして森の入り口に立つていた。

そして後から来た彼をびっくりさせてしまった。

「な、なんで？」

「近くの街まで、だから」

「はあ？」

「君が危ないと思つて！」

「……まあ、良いけどよ……」

これは護衛だ。うん。

だから、近くの街まで案内して、大丈夫だつて分かつたらそれまで。

私は魔女だから。一緒に居たら後ろ指差されて迷惑かけちゃう。

けど、それでも、私は少しでも彼と一緒にいたい。

次の街まで。

もう少し、次まで。

いいや、もうちよつと、あつちは危ないから。

そうしてあの時私を引き留めた老人のように、いつまでも付いて回った。

わがまままで、駄目だというのに。

もしかしたら親友以上の感情も抱いてるのかも知れないなんて頭をよぎつたりもしたけど、流石にそれは言えない。

まず第一に、向こうは何も知らないから。私が実はその探してた人間なんだって。

こうして一緒に過ごして、旅をして、お互に気の合う仲だというのは向こうも分かってる。

向こうから言い出して恋仲にならなのは、私が育て親だからだろうだけに他ならない。

もやもやした感情を引きづったまま言い訳を続けて旅を続けて、いつの日か小さな町へ辿り着いた。

この町は昔も来たことがない。もしかしたら、私が隠居している間に新しくできたのかも。

「でもめぼしい感じはあんまりしないね。探し人はいそう？」

「わかんね。相変わらずずっと近い気配はしてるのに見つからないし、入れ違いになつてんのかねえ」

そら横にいますから。入れ違いどころか共に行動しておりますから。

「ちよつと聞いてみますか。てなわけで行つてくる」

「それじやあ宿取つてくるね」

もう手慣れたもので、手分けして別れる。

そういえば最近あんまりもう言い訳してないなー。

旅を始めて2年くらい経つちやつたかな。たまには家に帰らないとそろそろ盗賊はこないだろうけど、ボロ小屋が自然に押し潰されちゃう。

宿を取つてから彼を探して……見つからない。
どこへ行つたんだろう？

いつも待ち合わせは広場にしているのに、いつまで経つても現れない。
それほど広くはない町だからと欲張つて隅々まで探しにいったのかな。

……いいや、彼の場合だからそんな事はしない。しても、断わりを入れる。律儀な奴
だから。

何か嫌な予感がする。

嫌な——

——この魔法の気配！

強力な呪術だ！

それも、私が警告しておいた名前を使う系な！

すぐに息切れを起こす自分の身体に悪態をつきながら走り、気配を感じた場所に辿り着いた時には遅かった。

誰もいない路地裏の隅に、見知った顔が倒れてた。

彼はやられてしまっていた。

「なんで名前を教えたの!?」

絶対に明かしちゃ駄目だつて言つたのに！

「俺が言つた訳じやねえよ……。前の知り合いが……」

「知り合いなんて、そんな——」

この世界に来たのは、私と、親友と、他にも来ていたの……？

あの時の事故で他にも誰かが、それも知り合いが！？

「クソッ、あの馬鹿、ハーレムだのなんだのとか言いやがつて……！」

「は、はーれむ……？」

「俺が邪魔だとか言つて殺しに来やがつた！……ま、一杯奢つてやつたがな。サービ

スだ」

「全く上手くないよその言い回し……」

見れば、彼の持つてるナイフには血が塗られ、点々とどこかへ続く血痕があつた。

冗談を飛ばして何とか冷静を取り持とうとしてるのか、それとも私を安心させようとしてくれているのか。

とにかく駄目だ。

この魔法というか呪いは、確実に殺す為の……。

「なあにが、今日からこの俺様がニューリーダーだ！」だよ。お前もハーレムに加えたいとか抜かしてたけど、乗るなよ。なんか癪だ」

「何遺言みたいな事言つてるの！」

「好きなように生き、好きなように死ねなかつたなあ」

「もつと遺言に近づいてるじやん！ 勝手に諦めないでよ馬鹿！」

「俺の屍を超えて行け……ッ！」

「遺言芸はもういいよ！」

これは呪いだ。解呪する方法は、あるにはある。

強力だけどその分穴はある。

だけど……。

「それをすれば、君は死んだも同然だよ……」

簡単な事。

前世から今にかけての記憶を全部無くして、名前を無くしちゃえればいい。

呪いというのは思い込みによるものが大きい。だから自分の大切にしている名前を使われたら、どうしようもない。

その分、記憶に左右されるから消しちやえれば一緒に消える。

「記憶を、ねえ」

「私に……君を殺せないよ……」

「いつか思い出すだろ」

「そんな気楽な！」

家に置いてある薬を組み合わせればできるけど、そんなことしたら、今までの……。

それこそ、今まで親友としてずっとこの記憶が……。

「最期に見る顔がそんなじや死にきれねえよ」

あの老人^{ひと}みたいな事言わないでよ！

「んじや、見殺しにするのかい？」

「そんな……」

真っ白な頭で何も考えられなかつた。

ぼんやりとしつつ、気が付いたら森の中の家に戻つてきていた。

それに手元にはもう記憶消去の薬もある。

無意識に作つてしまつていた。

「やつぱりこんなの……駄目だよ……」

もう彼は、ほとんど動けない。

赤子に戻つたかのようにベッドで横たわつたまま眠つている。

そうするしかないんだ。

彼を、救うには。

何が正解なのは分からぬ。

これで命自身を救つたとして、彼自身の魂というか、それはどうなるのだろう？

「へつ、これで終わりか。悔いは無え。……楽しかつたぜ、お前とは……」

もう腕を上げるのも、口を動かすのも大変であろう彼が私の手元から薬をひつたくる
ように奪つた。

そして止める間もなく。

「あばよ、親友」

・
・
・
・
・

数日が経つて、彼は目を覚ました。
何も知らずに。

「ここは……」

「目が覚めたかい？　ここは魔女の家だよ。森の入り口に倒れていたところを拾ったの
さ。……見捨てるなんてことは、駄目だからね」

それは十何年も前の話。

だけど彼はそれをつい先日の事だつたかのように受け取り礼を言つた。
「しばらくはここが君の家だよ。出ていきたいと思うまではね」

「ありがとうございます、レイヴン」
固まる。

私はまだ名乗つていないので。

「あ、違いました？　……あれ、なんで俺、この名前を……」

「……寝ている内に話しかけたのを、覚えてたのかもね」

「そつか、そつかかもです」

私の愛おしい親友は、今はいない。

20 旅には危険が伴うよ。

けれどもしかしたら、いいや。
また彼が旅に出たいと言つた時に教えればいい。
旅には危険が伴うと。